頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム
—世界の成長と共存を目指す革新的生存基盤研究のための日本・アセアン協働強化—
報告書

フィリピンの災害対応における在地文化の役割

派 遣 者：山本　博之
派遣期間：2015 年 6 月 1 日～3 月 31 日
派 遣 先：アテネオ・デ・マニラ大学（フィリピン）

キーワード：災害対応，記録・記憶，在地文化

1．研究課題について　(400 字程度)

フィリピンを対象に，災害対応において在地文化が果たす積極的な役割を調査する。近年，急速な経済成長と都市化の進展に伴ってアジアの災害リスクが高まっている。ASEAN（東南アジア諸国連合）諸国では域内の人の移動の活発化に伴って幼少時からの災害対応の経験や教訓が互いに異なる人々が隣り合わせで暮らす状況が生じており，災害対応においては社会文化的な側面を考慮に入れることが不可欠である。派遣者はこれまでインドネシアの地震・津波災害に関する被災・救援・復興について調査してきた。インドネシアとフィリピンの災害対応を比較検討するとともに，ASEAN 諸国内で災害対応に関する課題と関心を共有する研究者や実務者のネットワーク形成を試みる。調査対象は自然災害を主とするが，人為的災害を含む災い一般を対象とする。また，文芸作品や大衆文化などを通じて災いの経験が社会にどのように記録・記憶されているかについても調査する。

2．**派遣の内容**　(400 字程度)

(3)「安寧社会の実現」の課題の一環として，災害とコミュニティの機能に関わる研究（⑧）を推進した。2015 年 6 月にアテネオ・デ・マニラ大学にてフィロメノ・アギラー教授と研究打ち合わせを行った後，同月から 8 月にかけて，同大学図書館にて資料収集を行うとともに，同大学の研究スタッフとの情報共有・意見交換を行った。9 月から 11 月にかけてフィリピンのネグロス島およびレイテ島でフィールド調査を行った。ネグロス島ではドゥマゲッティ市を拠点とし，シリマン大学の研究スタッフと情報共有・意見交換を行った。レイテ島ではタクロバン市を拠点とし，中国系住民のインフォーマントを通じて災害対応における混血者コミュニティに関する情報収集を行った。2016 年 1 月から 3 月にかけて，アテネオ・デ・マニラ大学の図書館にて追加資料を収集するとともに，同大学の研究スタッフと意見交換を行い，研究成果を取りまとめ，国際会議を開催して成果を発表した。

3．派遣中の印象に残った経験や体験　（800 字程度）

派遣者が馴染みのあるマレーシアやインドネシアとの対比においてフィリピンで印象に残ったこといくつか。

(1) コミュニティのガードが固い。駅やモールなどの公共施設の入り口では荷物検査をされる。街には塀とゲートで閉ざされていて部外者は簡単に入れない住宅地がいくつもある。人は所属先の身分証明書を首からぶら下げていて，それがないと職場や学校の入り口で止められる。あるとき，人に教えられてある資料館を訪ねたところ，一般に公開されている施設のはずなのに，紹介がない人には利用させら

れないと門前払いを食らった。後日，その資料館のことを教えてくれた人の紹介を得て再び訪ねると，貴重資料コレクションを含めて自由に閲覧させてもらえた。コミュニティの入り口のガードは固いが，いったん中に入れてもらえれば奥の奥まで通してもらえる。家族になると助け合うし，血の繋がりがなくても家族扱いになると助け合う。災害時の自助・共助と外助の境界をどう考えればよいのか。

（2）列を作る。駅や商店で順番待ちする人たちが自然発生的に列を作る。駅では何十メートルもの行列ができることがしばしばあるが，次々に処理されていくので待ち時間はそれほど長くない。後から来た人が列に知人を見つけて割り込みすることは受け入れられているようだが，割り込んだりせずにみんな黙って列に並ぶ。順番に従って待っていれば必ず結果が得られるという社会への信頼感の表れか。（ただし，不思議なことに駅のホームで電車に乗り込むときには我先を争う大変な騒ぎになる。）

（3）建物が無駄に広い。建物がどれも立方体や直方体の形をしており，隣どうしの建物を繋げやすい印象を受ける。駅などの公共施設の建物は広く，無駄な空間がたくさんあるために移動の際には余計な距離を歩かされるが，数十メートルの行列ができてもその空間に収納でき，台風で大雨が降っても多くの人が屋根の下に入ることができる。無駄の部分があることがレジリエンスを高めている。

（4）○か×か。何かを決めるときは○か×かの二者択一の形にして決める傾向があるようだ。カジノでルーレットのような賭ける目がたくさんある種目でも，大か小か，親か子かという二者択一の賭け方に人気がある。勝ちか負けかの 2 つに 1 つで，負けたらあっさり負けを認めて，次の機会を狙って出直す。フィリピンと違って勝ち負けをはっきりさせない社会では，負けたときに仕切り直しての出直しがしにくいかもしれない。

4．目的の達成度や反省点　（400 字程度）

アテネオ・デ・マニラ大学にて 2016 年 3 月に国際会議「International Conference-Workshop on Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia」を組織し，研究成果を報告した。会議は 2 日間にわたって開催され，フィリピン、インドネシア，マレーシア，日本の研究者による 24 件の報告が行われ，洪水対策，防災教育，災害情報管理，交通渋滞，NGO や SNS の役割など多岐にわたるテーマを議論した。

派遣先は首都のアテネオ・デ・マニラ大学であるが，地方でのフィールド調査が必要と考え，ネグロス島ドゥマゲッティ市を拠点とし，同市のシリマン大学を何度か訪れてフィールド調査を行った。ただし本事業のフィリピンにおける連携機関はアテネオ・デ・マニラ大学のみであり，シリマン大学を含む他の大学などでの研究打合せやフィールド調査のための経費を本事業で負担してもらえなかった点が反省点である。

5．今後の派遣における課題と目標（400 字程度）

2016 年度には２ヶ月間の派遣により、文芸作品や大衆文化を通じて災いの経験がどのように社会に記録・記憶されているかを中心に調査する。また，長期国外滞在者の間で災いの経験がどのように記録・記憶されているかについて、マレーシア・サバ州のフィリピン系コミュニティで調査を行う。